

契沖の「一大明眼」とはどういうことか

前稿までで、契沖が三条西家から細川幽齋まで伝えられた秘伝の家説を論拠としていた中世歌学を「古書」を見るという方法によって打破したこと、そこに契沖の学問的方法の真髓があるとして宣長が終生の方法の基底としたことを見てきた。

『排蘆小船』から『石上私淑言』にいたる歌論、『紫文要領』における源氏物語論、『古事記伝』を貫く古道論の全体が、若芽の状態であるとはいえ、すでに『排蘆小船』において一つの全体として提示されているのだが、その中心は、あるがままの情（「物のあはれ」）の表現としての歌の本質に関する議論なのであり、それは悟性以前の感受性の次元から出発して人間の表現行為を基礎づける試みであったと言える。

ところで、宣長はそこに契沖の「一大明眼」を認めたのだった。この「明眼」とは、「この道」すなわち歌の道であり、歌学であるが、それが中世の歌学によって掩蔽されて、曇らされ、暗くされてきた状態であったのを「本来の面目」において見た「明眼」である。

この点、小林秀雄『本居宣長』が「一大明眼」ならびに「本来の面目」に関して、「彼が契沖の『大明眼』と言ふのは、どういふものであつたか。これはむつかしいが、宣長の言ふところを、そのまま受取れば、古歌や古書には、その『本来の面目』がある、と言はれて、はつと目がさめた、さういふ事であり、私達に、或る種の直覚を要求してゐる言葉のやうに思はれる。」と読み取っているのは、文脈の理解として賛同できない。

細かい話になるが、結果は重要だから書き記すことにする。

『排蘆小船』の行文は、「ここに難波の契沖師は、初めて一大明眼を開きて、この道の陰誨（曇っていて暗いこと）を歎き」から「初めて本来の面目を見付け得たり」へと続いているのだから、明るい眼によって暗くされている「この道」の「本来の面目」を「見付け」ることができたという文脈を形成しているわけで、「本来の面目」とはどう見ても、これまで暗くされてきた「この道」のことである。小林の文章を読むと、あるいは「本来の面目を見付け得たり」の主語を宣長と取っているようで、それで「古歌や古書には、その『本来の面目』がある、と言はれて、はつと目がさめた」という理解になるのであろう。そうではなく、契沖がその明眼によって暗くされてきた道を歴史上はじめて見つけることができたと言っているとは解釈すべきであろう。

これまでの歴史の中で、——その歴史は、ここでは、中世以来の歌学によって歌の「道」が掩蔽されてきた歴史ということになるが、ずっと先においては漢意（からごころ）によって「古道」が掩蔽されてきた歴史ということになる——暗くされて見えなくなっていた「道」を見るということ、そういう「眼」が契沖の「一大明眼」だと私は考える。小林は「彼が契沖の『大明眼』と言ふのは、どういふものであつたか。これはむつかしい」と言っているが、暗くされて見えなくなっていたもの（「道」）を見るための明るい眼であることが分れば難しくはないし、そう理解することによって、いかにも宣長らしい命題がここに述べられていることが明瞭になると思う。

言い換えれば、宣長が契沖において感得した「一大明眼」とは、隠されていた真理を見る眼である。宣長は世界にそういう真理が隠されていたことに真実驚いたに相違なく、その新鮮な感動と興奮が「ここに難波の契沖師は、初めて一大明眼を開きて、この道の陰誨（曇っていて暗いこと）を歎き」から「初めて本来の面目を見付け得たり」へと続く文章の波打つようなリズムとなって具現化しているように思われる。

実際、この文脈は一貫して隠された真理（「道」）を「見ること」をめぐる展開されていたのである。しつこいようだが、「本来の面目を見付け得たり」に続く文章をふたたび引くと、

大凡近来此人のいつる迄は、上下の人々みな酒にゑひ、夢をみてゐる如くにて、たはひなし、此人いてておとろかしたるに（〔に衍〕）ゆへに、やうやう目をさましたる人々もあり、されとまだ目のさめぬ人々が多き也、予さひはひに此人の書をみて、さつそくに目がさめたるゆへに、此道の味、をのつから心にあきらかになりて、近世のやうのわろき事をさとれり、これひとへに沖師のたまもの也、（注）

となっていて、契沖が出るまでの人びとは上（堂上人）も下（地下人）も「夢をみて」いるようなものだったというのであり、また、契沖が出てその人びとの目を覚ましたゆえに、次第に夢から醒める人びとも出てきたと展開している。そこで「此道の味、をのつから心にあきらかにな」ったわけである。（ちなみに、この「味」というテーマも、「心」に関わって言われているだけに重要である。）

この件は、どこかプラトンの初期対話篇の代表作『国家』（『共和国』とも）第7章に描かれた「洞窟の譬喩」を思い起こさせるところがある。そこでは地下にある洞窟状の住いのなかに手足も首も縛られた状態にいる人びとが洞窟の壁に映った器物の影を真実の実体だと思っているという寓話が語られている。プラトンもアリストテレスも、洞窟から出て、太陽の下に展開する真実在の世界を見ることを「テオリア」（観想、認識）として重んじた。

この一致は果たして偶然であろうか？

私にはそうは思われない。「眼」で「見る」ということは、明るい光の下では物がよく見え、暗い闇の中では見えないという実体験から、真理というものは隠されているものであって、光を当てて明確に見なければ現れることがないという普遍的な叡智までを広く覆うものとして、恐らくあらゆる言語のなかに存在する語彙なのではあるまいか。

宣長の『排蘆小船』が契沖の「一大明眼」を称讃する文脈において「眼」「見る」という語彙を繰返し使って言わんとしているのは、まさにあるがままの「道」であり、「道」の「本来の面目」であって、それは中世歌学によって「陰誨」の状態にあったのであるから、問題の構造としてプラトンが「洞窟の譬喩」で言わんとしたことと一致するのである。

それゆえ、宣長のいう「道」は、形而上学的な構造（プラトンにおけるイデア論的な構造）において見られているということができよう。

形而上学的な真理と言うものは、ハイデッガーやデリダが繰り返し問題にしたように、存在しない何かである。特にデリダが西洋の形而上学の全歴史はプラトンの「存在-神-論」によって貫かれていると論じた（『グラマトロジーについて』）ことは有名である。つまり、真理がまずあって、それが具体的な世界を与えているという構造において世界を理解するのが西洋形而上学の前提であり続けてきた

ということである。

宣長が「道」ということを論じる際にも、この手の分かりにくさ（ある意味での神秘主義）が生じているように私には感じられてきたし、「敷島の和心」を「朝日にほふ山桜花」に譬える心も窺い難いように思ってきた。また、彼が神々の世界の話に惹かれるのも彼の「古学」を形而上学的に構成しようとする意図があったからではないかとも思われる。『古事記伝』の副産物としての『三大考』などいかに形而上学的なテキストであり、それゆえにまた、平田篤胤に影響を与えたのもあろう。

ただし、この問題を肯定的に捉えるか、否定的に捉えるかについては当面留保することにしたい。ここでは問題の所在を指摘するにとどめる。

以上、宣長が契沖の「眼」ということについて論じた意味について掘り下げてみたが、宣長が敬仰した契沖は解釈上「耳」のテーマを重んじた。このこともまた別稿に書くことにする。

宣長も『古事記伝』総論中の「訓法の事」では「口」や「耳」のテーマをさかんに持ち出してくるのだし、「心」「意」というテーマは宣長の全著作を通じて現れるのであるが、それらは、ほぼ言葉（「こと」）と関連して論じられるのであり、また、言葉（「こと」）は「耳」や「口」と関連して捉えられている。

特に『古事記伝』は、「漢文のふり」を払い除けて「古語のふり」を求めることを「古学」の使命だとしている（『本居宣長全集 第9巻』、1968年、筑摩書房刊、p.32）のだが、この「古語のふり」を弁別する究極の器官として「耳」と「口」が意識されているのは、意外でもある。宣長と言うとまず用例に即した実証という印象があるからだ。

ところで、「眼」「耳」「口」「心」といったテーマはすべて身体に関わる。ここで言う身体とは自己と世界の関係についての感覚である。簡単に言えば自己に即して捉えられる世界である。そういうことが若い時代から物事を考える時の根底にあるということは注意してよい。

（注）005 稿に「『本居宣長全集第二巻』、一九六八年、筑摩書房、七七一七八ページ。なお、原文の仮名はカタカナであるが、読みにくいので平仮名に換えた。また、繰り返し記号は入力が難しいので「あさあさしく」「たたみなりに」のように同じ文字をそのまま繰り返した。以下すべて同じ。」と記したように、『排蘆小船』の原文は漢字片仮名交じり文である。

本稿では片仮名を平仮名に書き換えたほか、繰り返し記号は上記の如く処理したこと、再度読者の注意を喚起しておきたい。引用の際には必ず筑摩版全集の原文にあたられたい。

本稿は筑摩版全集の翻刻に忠実に従っており、たとえば、「大凡近来此人いつる迄は」「此人いてておとろかしたる」などは、「いづる」ではなく「いつる」、「いでておどろかしたる」ではなく「いてておとろかしたる」のままとしているが、一方、筑摩版翻刻には「されとまだ目のさめぬ人が多き也」の「まだ」や「人が」など濁点の付されているところもある。

2020年3月26日 研究代表者 西澤 一光